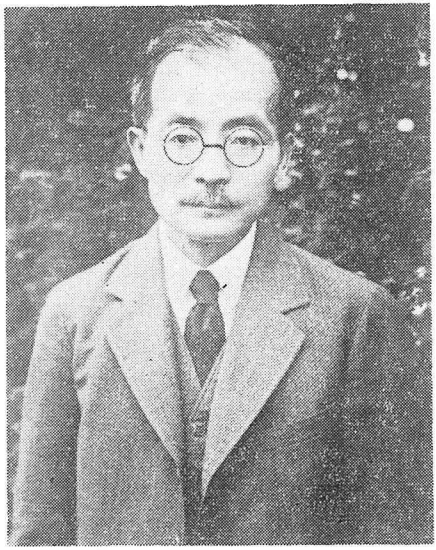
本会顧問　矢野仁一博士訃



本会顧問・京都大学名誉教授矢野仁一博士は昭和四十五年一月二日午後九時、倉敷市において逝去された。享年九十七歳であった。

博士は明治五年五月十三日、山形県米沢市に生まれ、第一高等中学校から東京大学（当時東京帝国大学文科大学）史学科、同大学院において学ばれ、早稲田大学などで講師として教鞭をとられたのち、明治三十八年に東京大学助教授に任ぜられ、同年清国から北京進士館教習として招聘せられた。大正元年、帰国して草創間もない京都大学（当時京都帝国大学文科大学）助教授に任ぜられ、同九年に教授となって東洋史学第三講座を担任、昭和七年に退官されるまで、研究に専念されるとともに熱心に後進の指導にあたられた。同年、名誉教授の称をうけられた。

博士ははやくから東洋近世史研究に志ざされ、「露清関係殊にネルチンスク条約について」の卒業論文を書かれてより以来、とりわけ外交史方面の研究を開拓された。博士は、中国文献のみならずひろく欧米文献をも利用されて外交史研究に鋭い視角でとりくまれた。しかも単に文献だけでなく、激動する中国を自ら見聞された経験やアメリカ・フランス・イギリス・インドなどに留学視察された経験によって確かめられた各論考は、今日まで不朽の業績として人々に多大の影響を与えつづけている。各種の雑誌に掲載された博士の著述は数多く、その全てをもれなく知ることは今となってはかなり困難なほどであり、かくも旺盛にして意欲的な研究活動の中から、「近代支那史」「支那近代外国関係研究」「近世支那外交史」「アヘン戦争と香港」「アロー戦争と円明園」「長崎市史」（通交貿易編）等々の名著が発表された。退官後は倉敷の寓居において研究を続けておられたが、その学問への情熱と史眼は齢をかさねて衰えず、昭和四十一年には九十四歳にして

単行本として最後の著作となった「中国人民革命史論」を発表され、晩年まで著述をやめられることはなかった。

博士はまたよく歌を詠む風雅の一面をそなえた方で、自家版の歌集もいくつか出版されている。

葬儀は一月四日、倉敷市の次男喪主正幸方においてしめやかにいとなまれ、この日博士から学恩を受けた多くの人々が参集して博士の死を惜しんだ。本会としても、斯学の隆盛と本会の発展に尽くされた博士の偉大な生涯を偲び、ここに会員諸氏とともに謹んで哀悼の意を表し、博士の御冥福を祈るものである

〔植松正記〕